

新入生に おすすめする1冊

今回は幼稚園から大学の方々に、おすすめの絵本・書籍を紹介していただきました。ぜひお手にとってみてください。

かみさまとこども

作：金川 幸子、サンパウロ出版、1976年発行

幼稚園教諭 岡林 亜季



ある夜のこと。トマスとアンナの兄妹は「かみさまに あいたいな」と思い立ち、家を抜け出して神さまを探しに出かけます。二人は夜空を照らす月や大空を羽ばたく鳥、背中を預けられる大きな木など、さまざまなものに出会いながら「あなたは かみさま？」とたずねていきます。月や鳥、木などは私たちが日常でも目にするものですが、読み手として二人の冒険に付いていくと新たな心でそれらと出会えます。優しい挿絵と素朴なやりとりの中から一つひとつの存在や営みの尊さを感じて、世界がより愛おしくなります。

この絵本は1976年に初版が発行されているのですが、キリスト教保育が大切にしていることは半世紀前も今も変わっていないのだと感じます。これから新入園の子どもたちは、日々のお祈りや教会学校生活、園生活を通して少しずつ神さまに出会っていきます。時には神さまのつくられた目に見えるものに導かれながら、目には見えない神さまと心の目で出会っていくことでしょう。





ミリーのすてきな ぼうし

作: きたむら さとし、BL出版、2009年発行

初等部6年 木村 紗奈

1年生のみなさんご入学おめでとうございます。

私が1年生におすすめしたい本は「ミリーのすてきなぼうし」です。この本ではミリーという女の子があるぼうしを買うお話です。そのぼうしはミリーが想像したことが形になるぼうしでした。ミリーがお花を想像するとお花でいっぱいになるのです。ミリーは気づくのです。ミリーがみんなのぼうしを見たように、みんなは一人一人違うぼうしを持っているのです。このぼうしはみんなの得意なことや考え方を表しています。決してみんなが自分と同じ好きなことや考え方ではありません。授業や学校生活では自分と違う考え方のお友達に出会うかもしれません。それでも自分の考え方だけではなく、違うお友達の考え方を受け入れて柔らかく考えることが出来れば、それはもう立派な初等部生です。

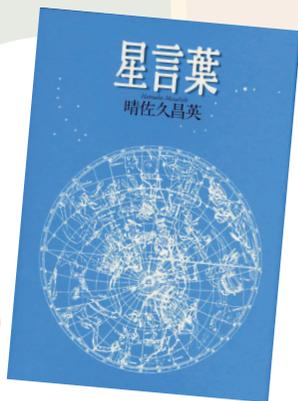
1年生は新しい学校生活が始まり新しいお友達ができると思います。これからの学校生活、初等部生ならではの体験がたくさんあります。楽しんで6年間を過ごして下さい。



星言葉

作：晴佐久 昌英、女子パウロ会出版、1997年発行

中等部3年 大東 愛依



私は人を信じたい。いつだってそう思っている。でもその思いを貫くことは、本当に難しい。

もしも、心から信じている相手に裏切られたら、私の心はどうになってしまうのだろう。想像ただけで胸が苦しくなる。だから、その時のために、少しでも「疑い」の気持ちを忍ばせることもある。そんなずるさにも私は気づいている。

それでも、人が人を信じる意味とはなんだろう。司牧の晴佐久昌英氏は、著書『星言葉』の中でこう述べている。

「どれだけ疑っても、疑いからは答えは出ない。どのみち一瞬先は、だれにもわからないのだ。信じた者だけが、その一瞬先を切り開く。」

未来を信じるのか。それとも疑うのか。著者からのメッセージが聞こえてきた。きっと相手ではなく、自分自身を信じることができるかが問われているのだろう。

本書には「信じる」を含め、生きる喜びを知るヒントとなる50の動詞の意味が紹介されている。あなたも、この地球に満ちている言葉たちの尊さを感じてみてはどうだろうか。



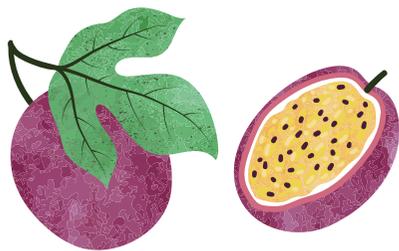


世界はラテン語でできている

作：ラテン語さん、SBクリエイティブ出版、2024年発行

高等部3年 古瀬 かなな

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます！高等部で図書委員をしている古瀬です。私が皆さんに紹介したい本は、高等部図書館にも所蔵されている「世界はラテン語でできている」です。なぜラテン語？と思う方もいるかと思いますが、ラテン語は意外と身近な存在です。たとえば、パッションフルーツ(トケイソウ)の"passion"は「情熱」という意味がまず思い浮かびますが、元はラテン語で「なにかを受ける」という意味があり、そこから「受難」と「情熱」という2つの意味が生まれました。パッションフルーツは「情熱の花」ではなく、花の形をキリストの「受難」の姿に見立てた名前なのです。このことをこの本で知った時、言葉の奥深さに感動しました。ラテン語に限らず、ものや言葉の意味に興味を持ったり、面白いと感じたりすることは、成績には関係ないかもしれませんがとても楽しいことです。新入生の皆さんも、何か気になることや楽しいことがあったら好奇心を持って(図書館なども活用して)ぜひいろいろ調べてみてください！



置かれた場所で 咲きなさい

作：渡辺 和子、幻冬舎出版、2012年発行

大学宗教主任・経営学部教授 高砂 民宣



「ひどく寒いぞ2.26」。1936年に起きた「二・二六事件」を、日本史の授業で語呂合わせをしながら覚えたのを思い出します。この事件は、若い青年将校たちが起こしたクーデター未遂事件でした。この日は雪が降っていて、当事の陸軍教育總監であった渡辺錠太郎氏は、娘の和子さんの目の前で銃殺されました。その時、この本の著者である渡辺和子さんは、まだ小学校に通う9歳の少女でした。

この壮絶な体験は、和子さんに深い心の傷を与えました。和子さんは18歳で洗礼を受け、クリスチャンとなります。そしてカトリック教会の修道女となり、ノートルダム清心女子大学で教鞭を執った後、理事長も務めておられます。

そうした89年に亘る劇的な人生の中から紡ぎ出された幾つもの珠玉の言葉が、この本の中には記されています。特に第4章「愛するということ」には、次のような言葉が見出されます。「父と過ごした9年、その間に一生涯分の愛情を受けた。愛情の深さと歳月は比例しない。たとえどんなに短くても、本物の愛は心を充分に満たしてくれる」。

生徒や学生だけでなく、保護者の方々にもお薦めしたい1冊です。